

はじめに

大学評価コンソーシアムでは、これまで大学評価担当者集会を年に1回、8月の終わりから9月にかけて行ってきました。今年度はそれに加えて、このような小規模な研究会も何回か開かせていただいております。

日本でもここ5年から10年の間に、IRが本格的に紹介されるようになり、言葉としては、知られるようになってきました。しかしIR自体の捉え方は人によってまちまちです。まちまちであってもいいとは思いますが、アメリカの大学の取組に関して、大規模大学での取組や、優良事例の紹介はなされますが、IRとしての一般的で基本的な活動はどういうものかということは、あまり紹介されないこともあり、なかなか見えにくい部分でもあります。

米国のIRオフィスが日常的に行っている集計、分析の背景には、米国のIRのミッションと業務を理解するための鍵が隠されています。どのIRオフィスも、必然性のない仕事はしていません。IRという意思決定支援機能を我が国の大学に組み込むためには、単に米国の活動の真似をすればよいというわけではなく、なぜその業務を行っているのか、なぜその指標を使って分析をするのか、ということを理解した上で、我が国での文脈に即して、適応可能性を検討して行くことが必要だと考えられます。

そこで、今回は、ミネソタ州立大学機構・ベミジ州立大学のIR・IEオフィスに勤務しておられる藤原宏司氏をお招きし、これまであまり日本で紹介されてこなかった米国のIRの日常業務について、実際のデータの一部を用いて、内容とその背景を解説していただきます。

本報告書においては、講演だけでなく、ベーシックな取組の中から、日本の大学が、米国との違いを意識しながらどういった活動を採用していくのか、またどのように組み替えれば、自分たちの大学の意思決定支援ができるのか、ということ意識した質疑応答も併せて収録しております。この報告書が、みなさまの大学におけるIR活動や意思決定支援活動の一助になれば幸いです。

平成26年3月28日

大学評価コンソーシアム 代表幹事

(九州大学 基幹教育院 准教授)

小湊 卓夫